

幕末明治の写真師列伝 第九十二回 宮下欽 その十四

7月17日、長岡藩の河井継之助は栃尾の仮本営に同盟軍の諸将を集めて、長岡城奪還の戦略について説明し、同盟軍諸藩の諸将の同意を得て、その作戦を実行することにした。それは、牽制部隊と主力部隊の2軍に軍を分け、牽制部隊は今町方面から本道を南下して、本道周辺の征討軍に対して攻撃を加えて、その注意を牽制部隊に集中するという役割だった。その間に主力部隊は八丁沖（長岡城の北東4キロ）の沼沢地に進軍して、敵の不意をついて前面の敵を攻撃しつつ、そのまま一直線に長岡城内に突入して、長岡城を奪還し、城内の敵を排除した後は今町より長岡に到る間の敵を駆逐するというものだった。

この作戦計画に基づいて7月24日の夜より行動を開始した。牽制部隊は会津藩、米沢藩の兵に長岡藩兵を加えた軍で、主力部隊は河井継之助の直接指揮する長岡藩兵17小隊、約690名であった。この主力部隊は先鋒軍（4小隊）、中軍（4小隊）、主力軍（4小隊）、後衛軍（5小隊）の4梯団に分けて八丁沖に進軍し、侵入後の進路も決めていた。

まず斥候を兼ねて1分隊を出して、進入方向の敵情を探り、奇襲に対する備えのないことを確認してから、24日夜（午後10時頃）主力部隊は八丁沖に到着して、沼地の葦と薄の間に事前に準備した田船、板等の上を、声を殺して潜行し始めた。安藤秀男『定本河井継之助』（白川書院、1977年）によれば、「午後一時、一番太鼓を合図に、各隊は兵糧をつかった。午後六時、二番太鼓で本陣前に整列し、沼をわたる用意にと、一人ずつ青竹をもらった。弾薬は一人に百三十発ずつ支給された。それに翌日の兵糧、および勝餅として、切餅二十一片（一食に七片）ずつ渡された。しかし城下は相伝の墳墓の地であり、町民とも関係が深かったので、渡された餅は減らす者が多かったという」主力部隊が八丁沖の向こう側の富島へ到着したのは翌25日の午前3時頃であった。

その時、すでに大里口、田井口では戦闘が始まっていた。不意をつかれた田井口守衛の兵は龍岡藩の兵で、その人数は68名であった。この兵がそれぞれ数百メートル離れた宮下、富島、亀貝の三か所の堡壘を守っていた。一か所にわずかに数十名の兵しかいないところへ、突然、大群が攻撃してきたので、応戦する間もなく浦瀬へ向かって退却して敗走してゆく。先鋒の軍事掛川島億太郎率いる1隊が富島村へ放火して渡渉成功の合図を送った。これを見た後方の長岡藩の砲兵は同盟軍に対して総攻撃の狼煙を上げる。その間にも後続の長岡藩兵は渡渉を終えて、次々と長岡市中へ突入し、征討軍を駆逐し始めた。中軍（4小隊）は予定通り亀貝から新保へ進み、各所に放火しつつ、蔵王、右門へ向かって突進した。中軍の鬼頭、小野田の2隊は、長岡北端の新町に入ったが、ここは征討軍が固く守っていたため激闘となった。

軍事掛花輪求馬率いる主力軍（4小隊）も予定通り亀貝から永田へ出て、間道を伝って長岡東北部に進軍し、各所の征討軍守兵と遭遇して、これを排除しつつ、途中から二つに分れ、2隊は神田町に放火して、町口をかためた。もう2隊は三ノ江土手から長興裏、長町、神田と進み、山田、草生津（くそうず）に到って、信濃川右岸に取り残された征討軍を襲撃した。

7月24日、松代藩は長岡城の北、石内村にある極楽寺に松代藩本営を置き、そこに総括隊長の河原左京が滞陣し、諸所を守備する松代藩部隊の指導と監軍を行っていた。24日、河原は東山栃尾口

の砲台を巡視して亀崎にいた。

7月25日夕刻、突然、松代藩本陣方面の石内村近くの富島、新保村から火の手が上がり、同時に砲声が松代藩本陣に近づいてきた。そこで直ちに偵察してみたところ、多数の同盟軍の兵が近づいて来ていることが判った。この時、松代藩本陣にいたのは岡野弥右衛門参謀、軍監、弾薬奉行、小荷駄奉行、兵糧奉行などの数人の幕僚たちと、これらの幕僚付属の兵たち、それに遊軍の兵30名と負傷治療中の傷病兵などの少数であった。そのため直ちに傷病者の避難を第一にして、敵の襲撃に対して対応すべく布陣を開始する。

夜半、そこへ参謀付属兵の町田磯之助が亀崎にいる河原左京の命令を伝えてきた。その内容は「翌早朝、官軍進撃に付、亀崎砲台へ弾薬を至急運送せよ」とのことであった。そこで近藤参謀、弾薬奉行に速やかに弾薬を亀崎に送るように兵に命じた。このような状況に同盟軍の方は亀貝、新保、新町と進撃してきて、すでに先鋒軍は蔵王に進軍し、敵の弾丸も石内に達するような状況になってゆく。蔵王には松代藩六番狙撃隊と八番狙撃隊の兵80名ほどが守衛滞陣していたが、そこへ突然多くの長岡藩兵が押し寄せてきた。この戦いで六番狙撃隊、八番狙撃隊の隊長も敵弾を受けて負傷し、松代藩兵8名が戦死、4名が負傷する。このため残りの兵は石内まで後退して本陣部隊と合流することになった。ここで石内にいるまだ戦える兵を分けて、その一隊を軍監前田角次郎が指揮して蔵王口に向かい、もう一隊を近藤民之助参謀が指揮し、大砲隊司令宮下欽次郎を率いて、極楽寺の後方に位置して散弾を撃って敵に対した。同盟軍は波状攻撃してくる。この地の松代藩軍には後続の支援部隊もなく、両隊共に苦戦を強いられることになった。

その頃、すでに長岡城下は各所に煙が出ているという状況で、砲声、銃声がすさまじい景況であった。岡野参謀はこの状況を確認するために付属の兵1名を連れて、征討軍の長岡本営へ向かうもすでに本営には誰も居らず退散している状況で、征討軍は長岡城下より撤退していることが判った。戻った岡野参謀は近藤参謀と協議して、この際、松代藩も兵を引き上げるべきと決断して、蔵王、極楽寺両所の兵を纏めて、血路を開いて、草生津の渡し口まで行き、まずは船に重傷の兵を乗せて、関原に護送した。後続の兵たちには乗る船もないため、信濃川に沿って上流の浦村まで撤退させることにする。それでも一部の兵は進んで敵を撃破しつつ、撤退の兵を纏めて本道を進み、妙見口に出て、三俵野村に留まった。

大砲隊司令宮下欽次郎は、草生津の渡し口付近の中島に留まり、松代藩の六文銭の旗を土堤の上立てて、遅れて撤退してくる征討軍の兵たちを收容すべく待機していた。そこに長州藩、加州藩の兵たちが集まってきた。大砲隊司令宮下欽次郎は、これらの兵たちと合流してこの地を死守すべきと考えたが、この地は敵中に孤立する地で弾薬も残り少なく、糧食もほとんどない状態であったため、宮下欽次郎は単身遊泳して信濃川の対岸の寺島村まで行く。幸いなことに寺島村には松代藩の陣馬兵糧奉行、小崎貫兵衛が滞陣しており、早速、尽力して弾薬、兵糧の用意をして、船に積み込み、宮下欽次郎もこの船に乗って中島へ戻ることができた。さらに別の船には、河原理助軍監、渡辺中州軍監ほか11名の兵が中島の応援に行くことになった。

（森重和雄）